

山人としての杜甫

金 文 京

京都大學

一 はじめに

宋初にできた南朝から五代までの一大詩文總集『文苑英華』卷三三「隱逸二」および同卷三三二「隱逸三」の「山人」の項目には五十三首の唐人の詩が收められている。これらの詩を通覽して氣がつくことは、そこに賣藥のことがしばしばみえることである。

たとえば王維「寄鄭霍二山人」詩に、「賣藥不二價、著書盈萬言」(藥を賣るに不二の價、著書は萬言に盈つ)、同じく王維「遊李山人所居、因題屋壁」詩に、「藥倩韓康賣、門容尙子過」(藥は韓康にたのみて賣り、門は尙子の過ぐるを容る)、劉長卿「送鄭山人還廬山別業」詩に、「忘機賣藥罷、揮手

山人としての杜甫(金)

杖藜還」(機を忘れて藥を賣りて罷り、手を揮りて藜を杖きて還る)、岑參「寄華隴山人李岡」詩に、「袖中短書誰爲達、華隴道士賣藥還」(袖中の短書は誰がために達せん、華隴の道士藥を賣りて還る。以上卷三三二)、また賈島「贈劉山人」詩に、「東都舊住商人宅、南國新修道士亭。鑿井養蜂休買蜜、坐山秤藥不爭星」(東都もと商人の宅に住み、南國新たに道士の亭を修す。井を鑿ち蜂を養いて蜜を買うを休め、山に坐して藥を秤るに星(目盛り)を争わず)、劉得仁「別王山人」詩に「山居衣以草、生計藥隨身」(山居の衣は草を以てし、生計の藥は身に隨う。以上卷三三三)というのも、おそらく賣藥のことを言うのであろう。このほか王勃「秋晚入洛於畢公宅別道王宴序」にも「山人賣藥、忽至神州」(山人は藥を賣り、忽ち神州に至る。卷七三四「別」)とあり、唐代の山人が多く賣藥に携わっていたことがうかがえる。

山人とは山中に隱棲する隱逸の士のことであるが、この二字を合わせれば「仙」になるように、古くは仙人のことであった。漢代の鏡銘には、

泰山作竟眞大巧 泰山にて竟(鏡)を作るに眞に大い

に巧みなり

上有山人不知老 上に山人有りて老いを知らず

徘徊神山采芝草 神山を徘徊して芝草を采る

渴飲玉泉飢食粟 渴きては玉泉を飲み飢えては粟を食

う

浮游天下敖四海 天下を浮游して四海に敖(遊)び

壽如金石爲國保 樂母極 壽は金石の如く國の保

(寶)とならん。樂み極まりなし。

の文言がみえるが、「神山」で「芝草を采る」山人とは、むろん仙人のことである。神山で長壽のための仙薬を採るのは、もとより仙人の本分であり、その仙人を目指す山中の隠士が採薬に勤しむのも、これまた當然であろう。しかし隠士といえども人間である以上は生活しなければならず、世俗との縁はそう簡単に断ち切ることはできない。生活の糧を得るために、修行のかたわら採集した薬を賣ることは、もつとも理にかなった生業であつたらう。

このように隠士と世俗との關係を意味する稱號として、特に山人が用いられるようになったのは、『文選』に收める孔稚珪「北山移文」(卷四三)の影響が大きいと思える。「北山移文」は、南京の北にある鍾山を擬人化し、その移文という形式で、南朝齊梁間の名士であつた周顒が隱遁のポーズを取りながら、實は出仕に熱心であつたことを揶揄したもので、文中に「山人去りて曉猿驚く」とある。杜甫の「覃山人隱居」詩(『杜詩詳注』卷二〇、以下杜甫の作品の引用はすべて同じ)に「北山移文誰が銘を勒せん」とあるのは、山人と「北山移文」との關係を示すものであろう。杜甫は自ら山人と稱したことはなく、また他人から山人と呼ばれたこともなかつた。しかし杜甫の實際相手には多くの山人がいたし、また杜甫自身も賣薬をその生業の一部としていたことが、その作品からうかがえる。特に乾元二年(七五九)、華州での官職を棄てて以降、放浪と各地での寄食に日々を送つた後半生における生活形態は、山人によく似たものであつたと言える。以下、杜甫の賣薬とその周辺の山人を見ることによって、その山人的側面を探ってみ

ることしたい。

二 杜甫と賣藥

天寶十載（七五一）、杜甫四十歳の年、朝廷に奉った「進三大禮賦表」（卷二四）に、「頃者賣藥都市、寄食友朋（さき頃都市に賣藥し、友朋に寄食す）」とある。これは「名山にて藥を采り、長安の市に賣り、口に二價せざること三十餘年」であつたという有名な韓康の故事（後漢書）卷一三「逸民傳」を踏まえたもので、必ずしも事實ではないかもしれない。しかし「三大禮賦」を推薦してくれた集賢院學士の崔國輔と于休烈に贈った詩（奉留贈集賢院崔國輔于休烈二學士）には、

儒術誠難起 儒術は誠に起き難きも

家聲庶已存 家聲は已に存するに庶し

故山多藥物 故山に藥物多く

勝槩憶桃源 勝槩は桃源を憶う

山人としての杜甫（金）

とあり、杜甫の故郷では藥草を採集あるいは栽培していたことがうかがわれる。

その後、華州での官職を棄て、まず赴いた流寓の地、秦州では、わずか三か月ほどの短い滞在中に藥草を採集していたことが次の詩句によつてわかる。

採藥吾將老 藥を採りて吾れまさに老いんとするも

兒童未遣聞 兒童にはいまだ聞かしめず

「秦州雜詩二十首」其十六（卷七）

曬藥能無婦 藥を曬すに能く婦なからんや

應門亦有兒 門に應じるに亦た兒あり

同右其二十

秦州で舊友の高適と岑參に送った詩「寄彭州高三十五使君適虢州岑二十七長史三十韻」（卷八）には、「時に瘧病を患う」という原注があり、詩にも「三年猶瘧疾、一鬼不銷亡」（三年猶お瘧疾、一鬼銷亡せず）とあるように、杜甫はこ

の頃、瘧疾を患っていた。子供には知らせずに藥草を採りに出かけ、それを妻の助けを借りて干していたのは、もとより自分の病氣治療のためであった。そのため杜甫は秦州に定住し、藥草を栽培する計畫ももっていたようである。

何當宅下流 何つかまさに宅下の流れ

餘潤通藥圃 餘潤は藥圃に通じ

三春濕黃精 三春に黃精を濕らし

一食生毛羽 一たび食して毛羽を生ずべきや

〔太平寺泉眼〕(卷七)^③

これは、いつか太平寺の泉を自分の家の庭に引いて、藥草を栽培したいということであろう。黃精は、「久しく服すれば身を軽くし年を延ばす」(『詳注』に引く『本草』)とされ、それを食して「羽毛を生じ」仙人になろうということであるが、これは一種のレトリックであつて、藥草畑で不老長壽の仙藥が栽培できるはずはない。まずは自分の病氣治療と家族の健康のため、そしてあわよくばそれを賣つ

て生計の一助としたという望みもあつてのことであろう。秦州での定住の目論みは、わずか三か月で挫折し、杜甫一家はさらなる輿地である同谷を経て、乾元二年の十二月には成都に至り、ようやく安住の地を見いだすことになる。杜甫が成都で營んだ浣花草堂においても、やはり藥草を栽培していたことは、次の詩に見える。

不嫌野外無供給 野外供給なきを嫌わざれば

乘興還來看藥欄 興に乗じ還た來りて藥欄を看よ

〔賓至〕(卷九)

傍架齊書帙 架に傍いて書帙を齊え

看題檢藥囊 題を看て藥囊を檢す 〔西郊〕(卷九)

近根開藥圃 根に近く藥圃を開き

接葉製茅亭 葉に接して茅亭を製す 〔高栢〕(卷十)

草堂での一時の平和な生活の中で、杜甫は庭に藥圃を開

き、そこに作った薬欄を訪れた客人に見せ、さらに薬をし
まった薬囊を整理していたのである。杜甫の藏書の中には、
定めし『本草』の類の醫藥書があったであろう。寶應元年
(七六二)、梓州、漢州、閬州など蜀の他地域に一年ほどの
旅に出た時の作「遠遊」(卷十一)に、

種藥扶衰病

藥を種えて衰病を扶け

吟詩解嘆嗟

詩を吟じて嘆嗟を解す

とあるように、種藥と吟詩は杜甫の肉體と精神を支える重
要な営みになっていたようである。翌廣徳二年、旅先の閬
州から成都に歸る時の作「將赴成都草堂途中有作先寄嚴鄭
公五首」(卷十三)其の三に、「書籤藥裹封蛛網」(書籤と藥
裹は蛛の網に封じられん)、また其の四に、「常苦沙崩損藥
欄」(常に沙崩れて藥欄損ずるに苦しむ)とあり、留守中の氣
がかりは書物と藥であった。書物と藥を對として用いる例
は、これ以外にも、

山人としての杜甫(金)

藥許隣人斷 藥は隣人の斷るを許し

書從稚子擊 書は稚子の撃けるに従う

「正月三日歸溪上有作簡院內諸公」(卷十四)

などがある。このような中で杜甫は、栽培した薬を、持病
を癒すために自分で服用するだけでなく、時に知人に分け
あたえ、その代價をもらうこともあったようである。それ
は詩作が單なる自分の個人的な慰めまたは思想表現として
の文學的營爲であつただけでなく、また知人や地方官僚と
の交際における重要な手段であり、生計とも密接に結びつ
いていたのと軌を同じくするであろう。寶應元年(七六二)
草堂での作である「魏十四侍御就敝廬相別」(卷十)に次
のようにある。

有客騎驪馬 客ありて驪馬に騎り

江邊問草堂 江邊に草堂を問う

遠尋留藥價 遠くより尋ねて藥價を留め

惜別倒文場 別れを惜しんで文場を倒す (以下略)

魏十四侍御の名は不明であるが、いずれ成都にいた高官であろう。その人がわざわざ遠く草堂を訪れ、薬の價を置いていったというのである。「文場を倒す」とは、詳注が「意氣は文場に傾倒す」と解するのによれば、魏侍御が杜甫の文才に傾倒した、あるいは逆に杜甫が相手に感服して別れを惜しんだということであろう。いずれにせよ杜甫はこの遠來の客を薬と文學でもてなし、なにがしかの報酬を得たことを含意する。

成都を離れ、さらなる流浪の旅に出た後も、薬は杜甫にとつて必需品であり、僻地の夔州で薬の入手が困難になった時には、知人から恵んでもらったこともある。「寄草有夏郎中」（卷十五）に言う。

省郎憂病士 省郎は病士を憂え

書信有柴胡 書信に柴胡あり

飲子頻通汗 飲子は頻りに汗を通じ

懷君想報珠 君を懷いて珠を報ぜんと思う

親知天畔少 親知天畔に少く

藥餌映中無 藥餌は映中に無し

柴胡はせり科の藥草で、解熱、解毒、鎮痛などの效力があるが、瘧疾にも效くという。飲子は湯藥を言う。この詩は韋有夏からもらった柴胡を煎じて飲み、汗が出るなど効果があったので、その禮狀として書かれたものである。

この後の放浪生活においても杜甫はしばしば薬について言及しており、大曆三年（七六八）の作「曉發公安」（卷二十二）には、「藥餌扶吾隨所之」（藥餌吾れを扶けて之く所に隨う）の句がある。「吾れを扶け」というのは、もとより持病を癒すことを言うであろうが、あるいはそこに賣藥の意味も含まれていたかもしれない。そして最晩年、潭州から衡州へ向かう時の作と考えられる「酬郭十五判官」（卷二十二）では、

藥裏關心詩總廢 藥裏は心に關わりて詩は總べて廢するも

花枝照眼句還成 花枝眼を照らして句ま還た成る

とある。病魔に苦しむ晩年の杜甫の關心事は、やはり薬として詩作であった。

このような薬草の採集と栽培、それにとまなう醫藥の知識は、むろん杜甫だけに特別なことではない。醫學が未發達かつ普及しておらず、また自給自足的な性格の強かった當時の生活においては、自ら薬を採集、栽培し、またそれについての知識を得ることは、士人にとつてはごく当たり前のことであつたらう。台州に左遷された鄭虔を追悼した詩「故著作郎貶台州司戶滎陽鄭公虔」(卷十六)に、「藥纂西極名」(藥は西極の名を纂む)とあるように、名士として知られた鄭虔も藥學についての専門的知識をもつていた。そしてそれは隱遁生活において不老長壽を目指す仙術の修行と關わる一方で、生計のために賣藥に従事する人もいたことは、『文苑英華』における山人の詩が示すとおりである。杜甫もむろんそのような時代を生きていたのであり、その詩の中に薬についての言及がしばしば見えるのは當然であろう。

三 杜甫と山人

次に杜甫と交際した山人について見てみたい。

① 李白

杜甫の知り合いの中で、山人と名乗つたもつとも重要な人物は李白である。李白は、最初の結婚をした安陸の山中に隱棲していた時の作「代壽山答孟少府移文書」(「李太白全集」卷二十六)で、「山人李白」と稱している。この文章は、孔稚珪「北山移文」の一種のパロディーで、「北山移文」が隱遁者の出仕を揶揄するのに對して、それを積極的に肯定し、山人としての李白の立場を表明したものである。李白が山人を自稱したもう一つの例は、「答友人贈烏紗帽」(同上卷十九)である。

領得烏紗帽 烏紗帽を領し得たるに

全勝白接羅 全く白接羅に勝れり

山人不照鏡 山人は鏡を照らさざるも

稚子道相宜 稚き子は相宜しと道う

友人からもらった役人の烏紗帽をかぶった李白は、隠者のかぶる白接羅よりはましだと思いつつ、自らの姿を鏡で見ることはしない。そこへ傍らから幼子が、よく似合うよと言ったというのであり、ここには隠棲と出仕をめぐる李白の複雑な心境が映し出されている。山人が李白の自稱であることは言うまでもない。

杜甫が李白から多大な影響を受け、李白と別れた後も彼を追慕する詩を作りつづけたことは、贅説を要しないが、ここで注意したいのは、秦州時期の杜甫が「夢李白」「天末懷李白」（巻七）「寄李十二白二十韻」（巻八）と、李白を思う真情が殊に色濃く顯れた名作を残していることである。これはもとより夜郎に流罪となった李白の身の上を案じてのことであろう。しかし李白の流罪が決定したのは至徳二載（七五七）の年末、杜甫が秦州に滞在したのは乾元二年（七五九）の秋で、その間に二年の時間差がある。李白は乾元二年の春、大赦により赦免されており、杜甫が李白の

身の上を氣遣っていたその年の秋、李白はすでに自由の身であつた。

これはむろん秦州という僻地にいた杜甫に、李白釋放の情報がすぐには傳わらなかつたためであろう。陳貽焮氏によると、最後の「寄李十二白二十韻」に至つて、杜甫はようやく李白赦免の消息を知つたのである。しかし翻つて考えてみると、そもそも杜甫は至徳二載四月から翌年の乾元元年六月までは左拾遺として朝廷にいたのであるから、李白の夜郎流罪の消息は、その間に知りえたのではないかとも思える。もしそうであつたなら、なぜそれから一年餘りも経つた後の秦州において、はじめて李白を思いやる詩を書いたのであろうか。

當時の正確な事情は今日では知る由もないが、少なくとも杜甫が秦州に来てはじめて李白流罪の消息を知り、これらの詩を書いたとは思えない。もし杜甫が、李白の流罪を早くに知っていたにもかかわらず、秦州に来て、はじめて李白が夢に現れるほどその身の上が氣になつたとするならば、それは官を棄てた自らの境遇を、朝廷を追われた李白に重

ね合わせ、その無念さが以前にも増して身に沁みることが、一つの原因ではなかったろうか。いずれにせよ秦州以降の杜甫の境遇が、李白のそれと似ることは客觀的事實である。

② 張彪と沈千運——元結『篋中集』の詩人たち

杜甫の秦州での作に、山人、張彪に送った「寄張十二山人彪三十韻」（卷八）がある。

獨臥嵩陽客 獨り嵩陽に臥せし客

三違潁水春 三たび違ふ潁水の春

艱難隨老母 艱難老母に隨いて

慘澹向時人 慘澹として時人に向かう

張彪はもと道教の聖地で、當時多くの山人が隱棲していた嵩山にいたが、三年前に戦亂によりそこを離れ、母を養うため人を頼って避難して來た。つづいて「關西得子孟隣」（關西に孟隣を得たり）とあるのによれば、張彪が母とともに

山人としての杜甫（金）

に避難して來たのは關西（華州）であり、ここでは「孟隣」（孟子の母の隣）すなわち杜甫の隣人であつたらしい。さてこの張彪は、

靜者心多妙 靜者の心は妙多く

先生藝絕倫 先生の藝は絶倫

草書何太古 草書は何ぞ太古なる

詩興不無神 詩興は神無きにもあらず

靜者（隱者）ながら多藝で、古風な草書を善くし、詩もなかなかであつた。そして、

數篇吟可老 數篇の吟は老いるべく

一字賣堪貧 一字は賣りて貧に堪う

詩作を老いの樂しみとしながら、書を賣つて生計を立てていた。さらに詩の後半では、

肘後符應驗 肘後の符は驗に應ずるも

囊中藥未陳 囊中の藥はいまだ陳べず

とあり、醫藥についても詳しくあったことが述べられる。

ところでこの張彪は、その「北遊還酬孟雲卿」詩に、「與君宿姻親、深見中外懷」（君とは宿に姻親、深く中外の懷を見る）とあるのによれば、杜甫のもう一人の友人である孟雲卿といわゆる表兄弟の間柄であった。杜甫には乾元元年六月、華州司功參軍に轉任する際の作「酬孟雲卿」詩、同年の冬、華州から洛陽に赴いた時の「冬末以事之東都、湖城東遇孟雲卿、復歸劉顥宅宿宴飲散、因爲醉歌」詩、さらに大曆元年（七六六）の作と推定される「別崔湜寄薛據孟雲卿」詩があり、杜甫とは親しい關係であった。そして孟雲卿、張彪とともに、元結と同郷（河南魯山）であり、元結の編纂した『筐中集』に登場する詩人である。『筐中集』には孟雲卿の詩五首、「北遊還酬孟雲卿」を含む張彪の作四首が収載されている。

乾元三年（七六〇）に編纂された元結の『筐中集』は、

聲律と形式に拘泥する當時流行の文學に反對し、現實に立脚した尙古主義を標榜したことで有名である。それは連作「古風」における李白の主張とも共通するものであった。

その『筐中集』の詩人たちと杜甫との關係については、伊藤正文氏の「杜甫と元結・『筐中集』の詩人たち」に詳しい。^⑥杜甫は元結と面識はなかったが、その文學的主張に深く共鳴したことは、大曆元年に元結の「春陵行」と「賊退示官吏」を讀み、その感動を綴った「同元使君春陵行」（卷十九）によって知りうる。伊藤氏によれば、元結の詩を杜甫に紹介したのは、おそらく孟雲卿であった。

孟雲卿は後に校書郎の官に就いたようだが、^⑦その生涯の大半は無官の身であったらしい。孟郊の「哀孟雲卿嵩陽荒居」詩（孟東野詩集）卷十によれば、彼も張彪と同じく嵩山に隱棲していたようであり、その生活もやはり山人的なものであったろう。

『筐中集』の最も重要な詩人は冒頭に詩四首を掲げる沈千運である。元結は『筐中集』の序の中で、次のように述べている。

吳興沈千運、獨挺於流俗之中、強攘於已溺之後。窮老不惑五十餘年、凡所爲文、皆與時異。故朋友後生、稍見師效、能似類者有五六人。於戲、自沈公及二三子、皆以正直而無祿位、皆以忠信而久貧賤、皆以仁讓而至喪亡。

(吳興の沈千運、獨り流俗の中に挺んで、強いて已に溺るるの後に攘う。窮老して惑わざること五十餘年、凡そ爲す所の文はみな時と異なる。故に朋友後生に稍やく師效せられ、能く似類する者五六人有り。ああ、沈公より二三子に及ぶまで、皆正直を以て祿位無く、皆忠信を以て久しく貧賤たり、皆仁讓を以て喪亡に至る。)

これによつて沈千運が『筐中集』の詩人たちの中心的存在であり、貧苦の中でその文學的節操をまげず、一生を終えたことがわかる。ところで高適の「賦得還山吟、送沈四山人」詩(『高常侍集』卷六)に、

賣藥囊中應有錢　賣藥の囊中まさに錢有るべし
還山服藥又長年　山に還りて服藥すれば又た長年

山人としての杜甫(金)

とあるが、この沈四山人とは沈千運のことである。高適にはまた「贈別沈四逸人」詩(同右)があるが、劉開揚氏の考證によれば、兩詩はどちらも天寶五年(七四六)の作である。^⑧この前年まで高適は李白、杜甫と共に過ごしていたのであるから、記録はないものの杜甫も沈千運にあるいは逢つていたかもしれない。高適は沈千運と親しかったようであり、少なくとも話ぐらいは聞いていたであろう。

右の詩句は、要するに藥を賣つて金がたまつたから、また山に還つて仙人の修行をすればよいということで、賣藥と仙術との關係を端的に物語っている。陶宗儀『書史會要』には「沈千運は八分を善くす」(卷五)とあり、書にも巧みであつたようであるから、あるいは書も賣つていたかもしれない、要するに山人、張彪と似たり寄つたりの境遇である。貧賤に甘んじ詩作に勵んだ『筐中集』の詩人たちの生活の實態は、およそこのようなものであつたろう。そしてそれは華州棄官以降の杜甫の境遇とも共通するものであつた。^⑩

③ 朱山人と斛斯山人——浣花草堂の隣人

成都の浣花草堂での日々は、杜甫の一生の中で最も穏やかな時期であった。そしてそこには近隣の住人との心温まる交流があつた。まず「北隣」詩（卷九）に、

明府豈辭滿 明府は豈に滿に辭するや

藏身方告勞 身を藏せんとて方に勞を告げたり

とあるのによれば、北側の隣人は、任期満了を待たずして退職した明府（縣令）であつた。そして南側の住人は「南隣」詩（卷九）に、

錦里先生烏角巾 錦里先生は烏角の巾

園收芋栗不全貧 園にて芋と栗を收め全くは貧ならず

とあり、菜園で栽培した芋や栗で、細々とした家計を支えていた。また「過南隣朱山人水亭」詩があり、その隣人は朱山人で、杜甫と親しく交際したらしい。名はわからない。

い。

もう一人、南隣の住人に斛斯融という人物がいた。「江畔獨步尋花七絕句」（卷十）其一の「走覓南隣愛酒伴」（走りて南隣愛酒の伴を覓む）の原注に、「斛斯融は吾が酒徒」とあり、杜甫の飲み友達であつた。「聞斛斯六官未歸」（卷十）には、

故人南郡去 故人南郡に去き

去索作碑錢 去きて碑を作りし錢を索む

本賣文爲活 本と文を賣りて活と爲すに

翻令室倒懸 翻つて室をして倒懸せしむ

とあり、この斛斯融は墓碑などの潤筆料で暮らす賣文の徒であつた。詩の最後に、

老罷休無賴 老罷して無頼たるなかれ

歸來省醉眠 歸り來らば醉眠をやめよ

と云うのをみれば、おおかた酒を飲みすぎて室（妻）を困らせていたのであろう。「過故斛斯校書莊」二首（卷十四）は、その死を悼んでの作である。

この斛斯融は、瞿蛻園、朱金城氏をはじめとする中國の研究者の説によると、李白の「下終南山過斛斯山人宿置酒」（『李太白文集』卷十七）詩の斛斯山人と同一人物であるという。^⑩この説には、姓と酒が共通するという以外、特に根據はないが、斛斯は遊牧民族系の稀姓でもあり、その可能性は高いであろう。もしそうであれば、斛斯融は長安から成都に移住し、杜甫の隣人となったのである。この斛斯融を含めるとすれば、華州の張彪、成都の朱山人と合わせ、杜甫の隣人には三人の山人がいたことになる。類は友を呼ぶというべきか。

④ 司馬山人

杜甫が成都でめぐり逢ったもう一人の長安での舊知に司馬山人がいる。「寄司馬山人十二韻」（卷十三）は、黃鶴によれば廣徳二年（七六四）、蜀中の旅行から久しぶりに成都

山人としての杜甫（金）

の草堂に歸った時の作である。詩に言う。

關内昔分袂 關内に昔袂を分かち

天邊今轉蓬 天邊に今轉蓬たり

驅馳不可說 驅馳は説くべからず

談笑偶然同 談笑は偶然に同じ

道術曾留意 道術曾つて意を留め

先生早擊蒙 先生は早とに蒙を撃つ

家家迎薊子 家家に薊子を向かえ

處處識壺公 處處に壺公を知る（以下略）

初めの二句は、長安で別れ、成都ではしなくも再會したことを言う。薊子は「會稽の市で賣藥」したという薊子訓（『後漢書』卷百十二下）、壺公は同じく後漢の費長房の懸壺の故事（同前）にちなんで、ともに賣藥を言う。司馬山人は醫藥の術によって成都において名を成したのであろう。「擊蒙」（啓蒙）ということからは、道術を兒童に教えるようなこともしていたのかもしれない。

⑤ 覃山人

山人に關する杜甫の最後の詩は、「覃山人隱居」(卷二千)、夔州での作と考えられる。

南極老人自有星

南極の老人自ずと星有り

北山移文誰勒銘

北山の移文誰が銘を勒せん

徵君已去獨松菊

徵君已に去りて獨り松菊

哀壑無光留戶庭

哀壑に光無く戶庭を留む

予見亂離不得已

予は亂離の已むを得ざるを見る

子知出處必須經

子は出處の必ず須らく經るを知らん

高車駟馬帶傾覆

高車駟馬は傾覆を帶ぶ

悵望秋天虛翠屏

秋天を悵望するに翠屏虚し

この詩はすでに述べたように孔稚珪「北山移文」を踏まえ、南極老人は杜甫を、北山移文は覃山人を指す。諸家の注は觸れないが、三四句も「北山移文」の「山人去兮曉猿驚」、また「誘我松桂、欺我雲壑」を暗に意識するであろう。李白の「代壽山答孟少府移文書」が「北山移文」を反

轉させ、隱遁から出仕を目指したのに對して、晩年の杜甫は「北山移文」を肯定して、覃山人が隱遁生活を全うせず、出仕したことを悲しんでいる。¹²⁾

四 おわりに——棄官と秦州以後の杜甫

以上、杜甫の作品の中から藥と山人についての記述を探ってみたが、そのほとんどは華州での官職を棄て秦州に流寓した後のものであった。杜甫の生涯を二分するとすれば、それは華州棄官以前と以後ということになる。棄官以後の杜甫は、伊藤正文氏の言葉を借りれば、「もはや唐という國家のうちに位置を失った寄生物の如き存在」となり、「社會的視野をもつ現實主義的作風が急激に影を潜め」、「作品傾向は大きく轉換した」のである。¹³⁾では杜甫はなぜ華州で官を棄て、またなぜ秦州を避難の地として選んだのであろうか。

まず後者から考えてみると、今日の我々から見れば、杜甫は秦州ついで同谷で艱難のかぎりや嘗め、成都においてようやく安住の地を見出したのであるから、最初から秦州

のような物騒な僻地ではなく、成都を目指せばよかつたようにも思える。しかしこれはむしろ後智恵で、杜甫は明確に秦州を目的地としていた。これについて杜甫自身は、「秦州雜詩」其の一冒頭で、「滿目悲生事、因人作遠遊」（滿目生事を悲しみ、人に因りて遠遊を作す）と述べている。

この「因人」について、清の施鴻保『讀杜詩說』は、『詳註』に引く顧宸注の「關輔大いに饑え、生事艱難、故に人に依りて遠遊す」という説を否定し、秦州での詩にそれらしい人物が見当たらないこと、また「因」と「依」は意味が異なるとして、杜甫は特定の人を頼つて秦州に來たのではなく、ただ大勢の人々と團體で逃げて來たにすぎないと主張し、陳貽焮『杜甫評傳』もこの説を支持する¹⁴。しかし秦州に行けばなんとかなるだろうという漠然とした豫想だけで、官を棄て、家族を連れて遠い旅路に踏み出せるものであろうか。そこにはなにかもう少し確實なものがあつたはずである。

この「因人」という言葉は、おそらく『史記』「平原君列傳」（卷七十六）の毛遂の故事にちなむ「公等録録、所謂

山人としての杜甫（金）

因人成事者」（公等は録録として、所謂る人に因りて事を成す者）にもとづく。これは姑息な態度で人に頼つて事を成すというニュアンスであろう。六朝以來この言葉は、特に任官または致仕にまつわる多くの用例をもち、近くはたとえ李白「贈張相鎬」詩其の二に「自笑何區區、因人恥成事」（自ら笑う何ぞ區區たる、人に因りて事を成すを恥ず。『李太白文集』卷九）がある。つまり杜甫は、秦州に行こうと言つたか、あるいは秦州に來いと言つたか、ともかく秦州行きを強く勧める何者かの意志に引きずられて、消極的に遠遊をなしたのではないかと思える。客觀的には、吉川幸次郎博士が「人に因りて遠遊を作す、というのは、この旅行が、他人の好意に頼つてのものであることを意味する¹⁵」というのがおそらく正しい。それが誰であつたのかは、本人が消極的であつた以上、作品に反映されていないのはむしろ當然であろう。

次に華州棄官について、『新唐書』「杜甫傳」（卷三百一）は、「關輔饑う、輒ち官を棄て去り、秦州に客たり」と言い、『詳註』などもそれに従うが、これはあるいは、棄官

の年を誤認して、同書「五行志」(卷三十五)に「廣徳二年秋、關輔饑」とあるのを、そのまま用いたのかもしれない。棄官の年、乾元二年の秋に飢饉の記事はない¹⁷⁾。もとより亂世のことであるから、食糧難であったことは事實であろうが、それが棄官の主因ではなかつたであろう。

杜甫自身は、「立秋後題」詩(卷七)で、「平生獨往願、惆悵年半百。罷官亦由人、何事拘形役」と述べている。この「罷官亦由人」をどのように解釋するかは問題であるが、「何事ぞ形役に拘せらる」が陶淵明「歸去來辭」の「既に自ら心を以て形役と爲さば、奚んぞ惆悵して獨り悲まん」にもとづく點から考えれば、陳貽焮氏が「做不做官還不是由自己來決定?」とするように、「官を罷むるは亦た人に由らんや」と反語に讀むのがあるいは適當であるかもしれない。つまり官を罷めたのは自分の意志によるということであるが、しかしそれを反語で表現しているところには、何か複雑な事情が隠されているにも思える。もし「人に由る」と肯定に讀めば、官を罷めたのも人のせいだが、しかしどうして形役に拘せられるであらう、となり甚だ齒

切れが悪い。ただし前の聯の平生獨往の願いもかなわぬま、半百の年を重ねたという惆悵の念とは、却つてよく符合する。形役に拘せられず獨往を望むかねてからの願いが、他動的になつたということであらう。いずれにせよ杜甫の罷官は陶淵明ほど主體的で決然たるものではなかつたらしい。「罷官」というのも「棄官」にくらべて、同義ながらやや弱い表現であらう。

この「由人」は、おそらく「秦州雜詩」冒頭の「因人」と響きあつていよう。想像を逞しくするならば、杜甫は、役人など罷めて秦州に避難しろという何者かの強い勸告にしぶしぶながら従つたのであらう。その間の事情を明らかにすることは、むろんできないが、巨視的に見るならば、安祿山の亂の後に起こつた大きな社會的變動が、杜甫をして官を罷め、秦州に赴かせたと云えるかもしれない。秦州以後の杜甫が、「唐という國家のうちに位置を失つた寄生物の如き存在」になつたということは、見方を變えれば、杜甫自身はむろんそう思わなかつたであらうが、國家の呪縛からある程度自由になつたということである。それを本

論の趣旨に即して言えば、それまでの官僚志向から離れて、杜甫は山人の仲間になったということになる。

しかし杜甫を山人と見なすことについては、他の山人とちがって杜甫は山中に隠棲したことがない、また山人も結局は官僚豫備軍ではないか、という反論もありえよう。ただこの時期以降の山人は、必ずしも山中に隠棲しつつ出仕を願う、いわゆる「終南の捷徑」的存在ではなかった。再び『文苑英華』の「山人」の項目に目を向けるならば、たとえば許渾「贈王山人」詩に、「貰酒携琴訪我頻、始知城郭有閒人。君臣藥在寧憂病、子母錢成豈患貧」(酒を貰り琴を携え我れを訪うこと頻りなり、始めて知る城郭にも閒人有るを。君臣の藥在らば寧んぞ病を憂えん、子母の錢成りて豈に貧を患わん。卷三三三)、白居易「題施山人野居」詩に、「得道應無着、謀生亦不妨」(道を得ればまさに着するところなかるべし、生を謀るも亦た妨げず。同上)、また同じく「隱者」の項の張籍「贈隱者」に、「先生已得道、市井亦容身。救病自行藥、得錢多與人」(先生已に道を得たれば、市井も亦た身を容る。病を救うに自ら藥を行い、錢を得て多く人に與う。卷三三二)のよ

山人としての杜甫(金)

うに、中唐以降の山人、隱者はもはや山中ではなく城中市井において世俗的活動を積極的にはじめている。杜甫が成都で親しく交際した賣文の徒、斛斯融や醫藥の術で名をなした司馬山人などは、その先驅であると見なすことができる。

山人といえは通常は明末の山人が有名である。明末の山人については、「昔の山人は山中の人、今の山人は山外の人」(『明史紀事本末』卷六十六「東林黨議」という批判が當時からあったが、山外の山人は、實は唐代からすでにいたのである。杜甫はその代表とはむろんいえないが、時代の大勢に押し流されて、知らぬ間にその世界に近づいていった存在として捉えることはゆるされるであろう。

註

① 王勃「還冀州別洛下知己序」に「王生賣藥、入天子之中都」(『王子安集』卷六、『文苑英華』卷七三四)とあり、この山人は王勃自身と考えられる。

② Bernhard Karlgren, *Early Chinese Mirror Inscription*, Bulletin of Museum of Eastern Antiquities, No. 6 1934 S 223 方

- 格規矩四神鏡の銘。「前漢鏡銘集釋」(『東方學報』京都、題八十四冊 二〇〇九) 参照。
- ③ 「詳注」に、「鶴注、太平寺在秦州。詩云、北風起塞文、當是乾元二年秋冬之交作」とある。
- ④ 陳貽焮『杜甫評傳』(上海古籍出版社 一九八八) 中卷五 八五頁。
- ⑤ この詩は劉長卿「北遊酬孟雲卿見寄」(『劉隨州集』卷五) と同じである。
- ⑥ 『中國文學報』第十七冊(京都大學中國文學研究室 一九六二)。
- ⑦ 元結「送孟校書往南海序」(『次山集』卷七)に「次山今罷守春陵、雲卿始典校藝閣」とあり、大曆元年の作と考えられる。注⑥伊藤論文参照。
- ⑧ 「唐才子傳」卷二に、「沈千運吳興人。工舊體詩、氣格高古、當時士流皆敬慕之、號爲沈四山人。天寶中數應舉不第、時年齒已邁、遨遊襄鄧間、干謁名公。」とある。
- ⑨ 劉開揚『高適詩集編年箋註』(中華書局 一九八二)の「年譜」参照。
- ⑩ 杜甫と沈千運の關係について、明の唐元竑『杜詩攷』は、「五篇中新婚別一篇首尾粹然。公詩體格變化不一、此數詩中危苦入情處、頗類沈千運。但千運孤潔削薄、公汪洋自恣、家數不同耳。」(卷一)と述べる。
- ⑪ 瞿蛻園、朱金城『李白集校注』(上海古籍出版社 一九八〇) 一一六六頁、また安旗主編『新版李白全集編年注釋』(巴蜀書社 二〇〇〇) 天寶二年の項(四九一頁)。
- ⑫ 「詳註」に引く顧宸の注に、「覃山人必老而就徵者、公過其隱居之所而傷其隱之不終也」とある。
- ⑬ 注6前掲論文。
- ⑭ 施鴻保著、張慧劍校『讀杜詩說』(上海古籍出版社 一九八三) 卷七(六四頁)。陳貽焮『杜甫評傳』中卷、五八九頁。また明の王嗣奭『杜臆』(上海古籍出版社 一九八三)も「遊須因人而無專主之人」(卷三、八六頁)とする。
- ⑮ 庾信「爲閻將軍乞致仕表」に「臣雖用命、不能奇策、功薄賞厚、因人成事」(『庾子山集』卷七)、同上「代人乞致仕表」に「臣特承先緒、進不因人。陛下憫臣無用舉直而黷。」同卷十四「周兗州刺史廣饒公鄭常神道碑」に、「是使陽球司隸、無所申戚。鮑恢都官、因人成事。徐陵「爲貞陽侯重興王太尉書」に「安有碌碌因人成事」(『徐孝穆集箋注』卷二)。陳子昂「爲將軍程處弼謝放流表」に「纔逾一年、即加正授、皆從宸眷、非有因人。」(『陳拾遺集』卷三)、張說「讓右丞相表二首」其の二に「臣少長儒門、懇鑿墳史。才非高格、官不因人。」(『張燕公集』卷十三)など。
- ⑯ 吉川幸次郎「秦州の杜甫」(『吉川幸次郎全集』第十二卷 筑摩書房 一九六八) 四三八—九頁。浦起龍『讀杜心解』(中華書局 一九六一)は「因人之人、或即指姪佐」(卷三之二、三八二頁)とする。

⑰ 『詳註』卷七「夏日歎」の註に『通鑑』を引いて「時天下饑饉」云々と述べるが、これは乾元二年二月の記事である。同詩に「雨降不濡物、良田起黃埃」とあり、この年が猛暑で早であつたことは事實だが、特に關輔一帯がひどい饑饉であつた證據はない。

⑱ 『舊唐書』『杜甫傳』（卷一九〇下）には「時關畿亂離、穀食踴貴」とある。

⑲ 陳貽焮『杜甫評傳』上卷、四九七頁。

⑳ 唐元竑『杜詩攷』が「罷官亦由人、洵是名言、然後世無敢掛齒頰者」（卷一）と言うのは、この句を肯定に取つてゐるのであろう。